

氏 名	下竹 亮志
学 位 の 種 類	博士（ 体育科学 ）
学 位 記 番 号	博乙第 2954 号
学位授与年月	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	権力装置としての運動部活動に関する社会学的研究 －「規律」と「自主性」という教育的技法に着目して－

主 査	筑波大学教授	教育学博士	清水 諭
副 査	筑波大学教授	教育学博士	菊 幸一
副 査	筑波大学教授	博士（体育科学）	深澤 浩洋
副 査	早稲田大学准教授	博士（教育学）	中澤 篤史

論文の内容の要旨

下竹亮志氏の博士学位論文は、第二次世界大戦後の日本社会における運動部の教育的価値について、議論の対立軸であり続けてきた「規律」と「自主性」に着目し、指導者言説と運動部の実践現場における人々のふるまいを分析することから、両概念がどのように関係づけられ、教育的技法として影響を及ぼしてきたのかをミシェル・フーコーの権力論、統治性論を理論的基盤にして明らかにしたものである。その要旨は以下の通りである。

著者は、指導者が著した図書等における指導者言説については歴史社会的アプローチによって、高校陸上競技部における生徒たちの実践については解釈学的アプローチによって、規律と自主性の解釈とその実践を分析・考察している。

著者は、1975年から1996年の指導者言説の分析から、第一に三無主義のような生徒の問題が認識される中で、人間教育としての運動部活動という主題が浮上したこと。第二に、指導者の課す厳しい練習など規律自体に対して、生徒自身が自己規律化すべく自主性が要請されたこと。第三に、規律一辺倒の指導に限界を感じていた指導者が練習では規律を、試合では自主性を割り振る技法を生み出していたと分析した。これらから、運動部活動が子どもや若者の言動に対する不安を埋め合わせる権力装置として位置づいていたと考察した。

続いて、著者は1998年から2013年の指導者言説を対象にし、規律と自主性の配分は練習と試合の住み分けから、日常とスポーツ場面の住み分けへと変化したことを明らかにし、日常における

生活習慣の規律を徹底的に説きつつ、練習や試合では自己規律化したふるまいの中に、楽しさを感じる自立した人間を育てることに教育的価値を見出していたことを明らかにした。つまり、指導者言説は「規律の中の自主性」から「自主性の中の規律」を語るものへ変容したと考察している。さらに著者は、1990年代後半以降、「心の闇」が語られるなど、大人たちが子どもや若者を理解することが困難になる中で、指導者言説が心の教育を施す場として運動部活動を肯定する言説へと変容し、その上で「親－子ども」「教員－生徒」「上司－部下」といった多様な関係性における大人たちのふるまいへの教示となっていたことを明らかにしている。著者は、これら指導者言説の歴史から、単に運動部活動に留まらない多様な関係性を包含する人間教育の指針とともに、人間であることの指針が示唆されてきたとまとめている。

こうして指導者言説を歴史的に捉えてきたことに加え、著者は、高校陸上競技部においてフィールドワークを行い、第一に部員たちが厳しい上下関係における「パノプティコン」的なまなざしの中で、当該の「高校らしさ」を表出する部の伝統に従順な身体が育まれていること。第二に、競技性を維持する過程において、部の規律に親和的な実践として自主性が部員に慣習化されていること。第三に、こうした過程で部員たちが部の伝統を自ら考えるかたちへと組み替える実践が存在していることを明らかにした。著者はこれらにより、陸上競技部に所属している生徒たちの自由な実践の可能性が自主性として捉えられる一方で、「忍耐力」や「我慢する力」といった規律の効果を体現していることから、規律と自主性とのバランスの上に部活動が実践されていることを明らかにした。そしてさらに、部の伝統を通じた規律化の過程で身体的かつ精神的な苦痛を体験し、怪我を負ったり、ときに目標を見失った生徒であっても、上級生との空間的あるいは時間的な分離を自分たちで作成し、同学年の仲間との間にヨコのつながりを生起させて、部に留まっていくことを明らかにした。

著者は、これらの結果を踏まえ、運動部活動の教育的価値としての規律と自主性は、時代状況に応じてその配分のバランスが変容し、現在の運動部活動の実際においても、両者が不可分なかたちで生徒の実践に組み込まれているとまとめている。すなわち、運動部活動が歴史的に教育的価値をもつものとして位置づけられ、解釈され、実践されてきたのは、自主性が決して抑圧されてきたのではなく、むしろ規律との関係において常にすでに生み出されてきたからであり、人間教育において、まさに規律と自主性の配分といった教育的技法が用いられてきたからであると結論づけた。

審査の結果の要旨

審査委員会では、本研究がこれまで運動部活動が規律と自主性との二項対立的な図式で議論されてきたことを越え、両者の関係性を踏まえた教育的技法として捉え、「自己規律化したふるまいによる自主性」に教育的価値が置かれていることを明らかにした点が評価された。その一方、指導者言説の歴史的な分析から教育的技法を論じることの理論的根拠について議論がなされた。また、運動部活動が歴史的に構築され、制度化されてきたことによる組織やシステムとしての側面から捉えることの重要性も指摘された。

令和2年2月4日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。